芸振

大分県芸術文化振興会議会報

No.50　56. 3

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・挾　間　正　年　編集人・尾　登　一　信

「芸振」50号を記念して

大分県芸術文化振興会議顧問　米　田　貞　一

「芸振」もいよいよ50号を迎えました。創刊から10年、よく続いたものです。小さい機関紙ながら内容は充実し、県下の芸術文化活動に大きな役割をはたしてきたのは皆さんのおかげです。毎号の企画、編集、執筆のご労苦に改めて感謝申し上げます。

芸術文化振興会議が発足してしばらく私たちは芸術祭の開催と育成に全力を尽くしてきましたが、会議の本来の目的は、言うまでもなく全県民の文化の向上、芸術活動の振興でありまして、そのために各団体、個人の親善交流、相互協力を欠かせません。具体的には機関紙や年鑑の発行がどうしても必要と思われ、昭和45年度に乏しい予算の中から全会員の熱意で発刊にふみきったのであります。本県芸術祭のすばらしい発展とともに「芸振」「年鑑」が継続刊行され、芸振活動をささえ励ましてまいりました。

大分県文化基金
シンボルマーク

せっかく「芸振」が50号を重ねたこの機会に将来の希望をのべさせてもらえば、何をするにも基礎は財政ですから、会費や購買料の問題、文化基金の活用などについて根本的に考えなければなりませんが、その前提として機関紙（誌）をどうするか。月刊または季刊の新聞・雑誌どちらにしても、読者の層を拡げ、編集にも参加させ、内容を高めるいっぽう興味とバラエティーを持たせたいと思います。もちろん編集スタッフの処遇や原稿料も奮発したいものです。

いま「芸振」のほか図書館や芸術会館でも同じような広報機関紙を出していますが、これなども文化的な大きい立場から連帯あるいは合同できないでしょうか。いずれにしましても他力本願でなく、県の芸術文化をみんなが自分のものにし、自分たちの手で活動の場を切り開いていきたいものです。もしこんな夢が芸振20年までに実現できたらどんなにうれしいことでしょう。

大分県芸術文化振興会議事務局長
尾　登　一　信

「芸振」の事務局長をしています。「芸振」の誰々さんがどうした。……等、「芸振」という言葉が抵抗なしに通用するようになった。16年の年輪はそれほど簡単なものではない。

50号を出すというので、バックナンバーをめくってみた。懐かしい名前が泉のように出てくる。大部分は現役で活躍している方々ばかりであるが、上田保先生、広瀬晴四郎先生の温顔はすでにない。

たまたま50号の編集者としてここに在るということの偶然さは、因縁めいたものまで感じる。それ程「芸振」は私の身体の一部分でさえある。

事務局の若い連中と盃をあげて唱う、それこそ「芸振会議ありがとう」である。

「芸振」1号～50号索引

年度	No.	発行年月	特集	内容
				（昭45･46年）県文化活動の現況と課題、（昭48年）大分県の市町村文化（51・52年）県芸術文化の夢をえがく。
昭和45年度	No.1	45.8	創刊特集	会の現況と今後の課題（米田貞一）、会報発刊に寄せて（田村卓夫）、芸振会議通、佐々木憲一、鶴見英之）、芸振役員名簿（45年度）
	No.2	45.10	県芸術祭特集	第6回県芸術祭開幕・芸術の秋（辻英武）、大分県芸術祭の歌、第6回県芸術県芸術祭主催行事・参加行事一覧、第2回九州芸振特別講演「朝のこない夜は
	No.3	45.11	県美術特集	美術館はいつできる（宮崎豊）、県美協（仲町謙吉）、日本画（田川奨）、洋画華道（津崎一石）、「朝のこない夜はない」（扇谷正造）、芸振の充実と普及に力を
	No.4	46.1	県文芸特集	1971年を迎えて・県文芸復興の機会（加藤真一郎）、詩（首藤三郎）、俳句（津県文芸誌発行状況一覧、「聖夜に」（松下竜一）、働く人々に支えられた芸振へ（中
	No.5	46.3	県芸術教育特集	すぐれた学問芸術と県民性（佐藤義詮）、社会教育と芸術文化（田村卓夫）、芸劇場、開学10周年を迎えた芸短大、才能教育と底辺のエネルギー（十時良）
昭和46年度	No.6	46.5	県音楽特集	SALZABURGと（千本延隆）、県音協（北村宏通）、オペラ（小長久子）、交響（田中絹枝）、詩吟（深田光霊）、鑑賞（板倉英之）、協調なくして音楽なし（伊勢
	No.7	46.7	県演劇特集	大分県の芸術文化行政（立木勝）、自立（尾登一信）、青年団（佐藤至良）、高校口提言25名、陳情書
	No.8	46.9	県舞踊特集	芸振会議の果たす役割（河野彰）、県日舞連（藤間小伊松）、花柳（花柳有句バレエ（笠木啓子）、バレエ（佐藤朱音、湯原恭子）、モダンダンス（樋口愁枯）、
	No.9	46.12	県立美術博物館建設促進特集	芸術の価値（上田保）、県立美術博物館について（宮崎豊、渡辺澄夫、首藤春別府美術館（佐藤村夫）、波紋（帆足清一）、九州各県立美術博物館建設状況、「付
	No.10	47.1	県地方史・文化財特集	大分県人と文化財（岩田正）、県地方史研究会（渡辺澄夫）、杵築史談会（土居正義、田口正治、岩男順、賀川光夫、入江英親、村松幸彦、荒金正憲）、波紋
	No.11	47.3	県地方文化団体特集	美を求めて（米田貞一）、「芸振」2年をふりかえって（田村卓夫）、地方文化活（渡辺泰三）、佐賀関（藤井孝）、津久見（左脇日出登）、臼杵（吉田公）、三重町
昭和47年度	No.12	47.7		初心（米田貞一）、昭和47年度九州地区文化振興会議＜第4回＞、文芸（長谷目（矢野朔雄）
	No.13	47.9		第8回県芸術祭開幕（武田芳太郎）、開幕演奏県民吹奏楽（中野幸和）、県芸術友芳雄）、俳句（平田寒月）、演劇（尾立卓道）、舞踊（平瀬克美）、美術（田川奨）
	No.14	47.12		喜劇は終った（高橋寿満）、芸術祭美術部門（菅久）、第4回九沖芸術祭（笠木
	No.15 No.16	48.3		芸術の大衆化（三重野耕治）、吹奏楽（和田政見）、大分交響楽団（岡村光郎）、句会（久保青山）、地方文化活動（岡部忠之）、（相良篤司）、（高橋正）、（田中昇）

（「芸振」主な内容一覧）

活動、（昭49・50年）あの頃・あの時 <戦後20年から県芸振会議が発足した39年頃までのこと>、	発行人（会長）	編集人（事務局長）	編集実務者
の出来たころ（宮瀬香多士）、第２回九州地区芸振文化振興会議の報告から（藤本政敏、菅久、北村宏	米田貞一	田村卓夫	菅久
祭を成功させよう（北村宏通、久保青山、鶴見英之、中野幸和、堤功、伊勢敏郎、藤本政敏）、第６回ない」（扇谷正道）			
（進来哲）、彫刻（岩男順）、工芸（楢原長甫）、書道（平田暘邨）、写真（糸井英雄）、デザイン（波多野義（狭間久）			
田露色）、（久保青山）、短歌（田吹繁子）、川柳（内藤凡柳）、小説（長谷目源太）、 文芸誌（大塚俊英）、沢とおる）			
術系大学への進学（藤原正教）、高文連、作文教育、書道教育、音楽教育、造形教育、舞踊教育、こども			
楽団（加藤公康）、合唱（狭間文男）、吹奏楽（和田政見）、 作曲（辛島武雄）、 軽音楽（中野幸和）、邦楽敏郎）	米田貞一	田村卓夫	菅久
（尾立卓道）、人形（安部康英）、舞台美術（古林茂三郎）、造形劇場（野呂祐吉）、 波紋（日名子信行）、一			
秀）、若柳（若柳吉正寿）、藤間（藤間茂登女）、民踊（園田喜平、江藤豊南）、県洋舞協（平瀬克美）、県民白鳥の湖の公演（竹内永）			
草、浜田九一郎、岩男順、大崎聰明、 藤原嘉久、渡辺恭英、首藤詔子）、美博建設期成会（仲町謙吉）、録」			
寛申）、竹田史談会（北村清士）、佐伯史談会（高木嘉吉）、文化財保護（橋本操六）、自然を守る会（松田（中谷健太郎）			
動（平野昭彦）、日田文化連（空閑重行）、 国東文化協（岐部与平）、 山香町文化連（倉田素直）、犬飼町（足立満喜人）、くさの会（藤原嘉久）、（小林、利田、遠藤）、（木村成敏）			
源太）、美術（十時良）、音楽（小長久子）、 演劇（野呂祐吉）、 舞踊（笠木啓子）、 事務局長に就任して	米田貞一	矢野朔雄	北村宏通
祭と音楽（辛島武雄）、集中行事、県民オペラ「蝶々夫人」（小長久子）、音楽の夕べ（中野幸和）、短歌（大			
啓子）、光をあてながら（柏木淳一）、オペラ雑感（小長久子）、ヨーロッパのぞき見（矢野朔雄）、陳情書			
オペラ「吉四六昇天」（小長久子）、演劇（野呂祐吉）、高文連（後藤和生）、県歌人クラブ（田吹繁子）、芹俳			

年度	No.	発行年月	特集	内容
				（昭45・46年）県文化活動の現況と課題、（昭48年）大分県の市町村文化 （51・52年）県芸術文化の夢をえがく。
昭和48年度	No.17	48.6		文芸復興のための一提言（山本峯生）、市町村の文化活動、中津（山本俊夫）、佐菊池幸園、菅淳一）、 マンドリン音楽を通じての芸術文化活動の抱負（福田五
	No.18	48.7		大分市の芸術文化活動の現状と課題（安東玉彦）、市町村の文化活動、文芸（奥文化団体事務局長研修会（菅久）、県下俳壇の現状（金田眸花）、 一口提言（上田
	No.19	48.8		山香町の芸術文化施策（渡辺政男）、市町村の文化活動、 民踊（岩間寛道、安者一覧
	No.20	48.10		日田市の芸術文化施策（畑英次郎）、市町村の文化活動、 演劇（中津留鉄男、むもの（野呂祐吉）
	No.21 No.22	49.2		竹田市の芸術文化施策（佐久間盛夫）、第９回県芸術祭をふりかえって、文芸有句秀、平瀬克美、永井豊恵）、演劇（中沢とおる、 安長正美）、 生芸（桑原秀
昭和49年度	No.23	49.6	県美術	夢のようなあの頃（宮崎豊）、 第１回県展受賞（阿南東林）、 昔の美協事務局紀群の出発（木村成敏）、県写真作家協会（大崎聡明）、グループ前衛（十時良）、菅玲子、三浦佐郷、西村春斎）、第１回県美展回録
	No.24	49.9	県芸振会議および県芸術祭発足の頃	県芸術祭10周年を顧みて（佐藤義詮）、 39・40年芸振会議の発足当時、県文化康）、近県博物館視察報告（菅久、 岡田三郎）、アンケート10年間をふりかえっ
	No.25	49.12	県文化財	県地方史研究会ことしは創立20周年（渡辺澄夫）、古要舞保存会（藤永義高）、江英親）、県教育委員会刊行文化財関係出版物一覧、 県文化財調査報告書、私
	No.26	50.3	県演劇	大分と日本最初の洋劇（上田保）、30円の入場料（安達昇）、 20年代の印象（堤み木座（佐藤至良）、つみ木座の上演記録、なにかがやれる瞳（中沢とおる）、ア男）
昭和50年度	No.27	50.6	県音楽	大分県の芸術文化行政（立木勝）、ＩＰ合唱団などの思い出（辛島武雄）、豊楽知、杉田信男）、教育音楽（真浄一雄、首藤幸人、田坂保、 加藤正人）、ウイスノ（糸永信義）
	No.28	50.9	県文芸	新しい県民文化の創造（米田貞一）、歌人クラブへ（鶴見英之）、県俳壇（久保青泰治、高橋文夫）、大分県文芸年譜、大分県人の著書一覧、 ある少年の出発点
	No.29	50.12	県地域文化および生活芸術	趣味としての芸術（山本峯生）、職場美術（此松法純）、職場音楽（中野幸和）、（尾登一信）、臼杵市（高橋正）、竹田市（帆足俯）、芸術とは、文化とは……、公民
	No.30	51.3	県舞踊	夢の舞台（宮瀬香多士）、洋舞（竹内永）、20年代の県洋舞界（平瀬克美）、あの代）、日本舞踊の種類とその代表作品、民踊（江藤豊南、河野豊州、 谷本一夫）
昭和51年度	No.31	51.6	大分県立芸術会館の夢	県民文化発展の母胎として（辻英武）、構想と開館に夢を（衛藤久）、会館独自のたこと（小野一郎）、いまからノドがなる（中沢とおる）、そこから香り高い芸術交流の場に（三重野元）、人と金の問題（狭間久）
	No.32	51.9	県文芸の夢	風土と大衆の中（挾間正年）、大分に欲しいもの（小郷穆子）、先人の足跡（小原多様性の中（河野輝暉）、伝統的な里謡県（土屋北彦）、新芸術会館での（疋田青
	No.33	51.12	県音楽の夢	三者の協調から（辛島武雄）、カルメン、第九に意欲（小長久子）、大分を日本のル（野崎哲）、 大分の合唱にかける（飯倉貞子）、 これからが正念場（木村一八（田中絹枝）、豊かな人間の道（田坂保）
	No.34	52.3	県生活芸術地域文化活動の夢	芸術の温床は友情（河野彰）、 20周年を迎えた芳美展（此松法純）、心を花（阿（岡部忠之）、 ふるさとの振興（岡田喜平）、 無気味な（渡辺泰三）、 大きく育ち田政司）、県社会教育委員一覧

活動、（昭49・50年）あの頃・あの時 ＜戦後20年から県芸振会議が発足した39年頃までのこと＞、	発行人（会長）	編集人（事務局長）	編集実務者
伯(石田明)、別府(古谷忠雄)、竹田(菅沢活水)、日田(寺川泰郎)、 一口提言(小原由岐雄、川村稔、彦)	米田貞一	矢野朔雄	児玉照明
野勝子、市丸嗣郎)、美術(富高文夫、森本茂、武田由平)、 第１回市町村単位ならびに地域における耕司、尾立卓道、長門はる子)			
部孝義)、音楽(伏野宗孝)、 地方文化の芸術文化活動(山本宗生)、 本年度県短文学大会 大会賞受賞			
菅沢活水、東政憲、尾立卓道)、県民オペラ「吉四六昇天」によせて(小長久子)、 県下の演劇活動に望			
(大友芳雄、久保青山、疋田青峰)、美術(菅久、山口九碩、三重野元)、 音楽(菊池幸園)、舞踊(花柳礼)、地域文化(幡東亀昌)、九沖文学賞決定			
(中山和美)、スバル時代(広瀬通秀)、書道隆昌のうら(平田暘邨)、戦後の書道協会(安部遊雲)、新世大分写真同好会(三重野元)、波紋(山口九碩)(小野一郎、児玉成弘、寺司勝次郎、 森夜潮、多邨常、	米田貞一	矢野朔雄	菅久
界の夜明け(仲町謙吉)、森の歌を全曲合唱(宮瀬香多士)、協和する心(平瀬克美)、 藤沼先生(加藤公			
て、アンケートから、10年間の県芸術祭行事、臼杵市に文化会館を(高橋正)			
佐伯史談会(羽柴弘)、県史料発刊(中野幡能)、佐伯市下城遺跡発掘(賀川光夫)、20・30年代の発掘(入			
は豊後高田地区文化財パトロール員(岩野勝)、大分県を代表するものは何か			
彦一)、青年演劇(高橋寿満)、高校演劇(尾登一信)、児童演劇(園田喜平)、 あすなろ(渡辺泰三)、つ ンケート「吉四六昇天」東京公演をみて、昭29年の大分市文化団体名簿、文化運動即大作主義(中津留鉄			
会(白沢正一郎)、心の豊かさ(衛藤久)、思い出(小長久子、加藤公康、 工藤紘喜、 平野博也、 久末 テリアコール(飯倉貞子)、県マンドリン界(堤功)、三曲協会(遠藤梢山)、民謡(池田萬龍)、自動ピア	米田貞一	衛藤久	菅久・藤原嘉久
山、足立雅泉)、県柳壇(金田眸花)、県里謡(土屋北彦)、県詩壇(首藤三郎、滝口武士)、県文壇(志村			
(長谷目源太)			
華道(瓜生超)、書道(山口九碩)、日舞(花柳有句秀)、青年演劇(菅沢活水)、地域文化活動と社会教育			
館の役割(篠原良虎)			
頃(佐藤朱音)、社会奉仕から(樋口愁枯)、日舞(花柳芳七治、藤間茂登女、花柳寿三鶴、 花柳三鶴千			
さらに10年後大分県は？(藤永義高)			
企画展を(北野隆士)、三つのお願い(日名子金一郎)、利用しやすい会館に(三浦敬信)、芸術会館に行っが(藤間茂登女)、新しい舞台活動の場に(笠木啓子)、リーダーシップをお願い(池田萬龍)、文化団体	辻英武	衛藤久	藤原嘉久
由岐雄)、児童文学の町(佐々木均太郎)、若い芽を育てつつ(木本数一)、 俳壇の舞台を(倉田紘文)、			
峰)、芸術創造のための(長谷目源太)、短文芸の炎を燃やそう(田村卓夫)			
ウィーンに(三浦敬子)、邦楽の美(遠藤梢山)、児童・生徒の特技を(鶴田真澄)、世界音楽フェスティバ 郎)、声楽の大分県(白根悦子)、民謡の宝庫(加藤正人)、壮大なブラス(糸永信義)、 自らの研修の中			
部華水)、個性を大きく(藤間茂登女)、書を通して(山口九碩)、農山村の文化(清成克行)、歳月の中にたい(中野幸和)、 合唱の輪(鈴木美智代)、 一わんの精神(江藤憲人)、 地域文化の振興と公民館(木			

年度	No.	発行年月	特集	内容
				（昭45・46年）県文化活動の現況と課題、（昭48年）大分県の市町村文化 （51・52年）県芸術文化の夢をえがく。
昭和52年度	No.35	52.6	県芸術祭の夢	芸術振興と芸術会館（立木勝）、美を受けとめる心（浅田弘明）、地方文化祭芸 開館にあたって（広瀬良博、芦刈政治）、芸術祭の今後（狭間久）、ミュージカル
	No.36	52.9	県舞踊の夢	地域文化活動の発展のために（矢野朔雄）、前進する県洋舞協（樋口愁枯）、心 登女）、底辺のひろがり（花柳昭寿香）、大分でなければ（花柳三鶴千代）、住民
	No.37	52.12	県演劇の夢	大分を新しい演劇の王国に（米田貞一）、演劇を通して（青田章）、発表の場（佐 センター（佐藤至良）、大同団結を（尾立卓道）、芸術会館で（渡辺覚）、ささやか
	No.38	53.3	県美術の夢	「倉敷」とまでゆかずとも（進来哲）、競い合おう（岡崎健治）、芸館活動を（二宮 輔）、制作の夢（佐藤邦生）、三才児の夢（若林董子）、日本画人口（露木恵子）、
昭和53年度	No.39	53.9	大分県芸術文化基金	さらに新しい夢の実現へ（挾間正年）、動きはじめた文化基金構想（後藤昭六）、 会委員決まる
	No.40	53.11	第14回県芸術祭	第14回県芸術祭におもう（宮崎豊）、松方コレクションを中心とした国立西洋 けて（糸永信義）、吹奏楽大分をうたう（中野幸和）、県芸術祭の裏方さん（菅淳
	No.41	54.1	第14回県芸術祭	高校生の文化活動に光を（土屋元造）、能「道成寺」を上演して（宮永育子）、14 第14回県芸術祭賞新人賞を受賞して（村上美佐子、田村洋彦）、県民オペラ10周
	No.42	54.3	国際児童年	国際児童年にあたって（三河尻修二）、手造りの文化と小刀（荒金学）、国際児 州グラフィックデザイン展（波多野義孝）、地域文化院内町、豊後水道の文芸2
昭和54年度	No.43	54.8	全国高校総合文化祭と芸術文化基金	第3回全国高校総合文化祭開催にあたって（江藤博）、事務局長就任（尾登一 ワーリング（船津弘子）（堀加津子）、文芸大分創刊（肘村康一）、日田文化活動（中
	No.44	54.10	第15回県芸術祭	第15回大分県芸術祭を迎えて（平松守彦）、演劇を創る（中沢とおる）、ふるさ （山元正名）、15回を迎えた県芸術祭（菅久）、滝廉太郎生誕100年記念演奏会（小 舞太郎）、（二宮重幸）、豊後水道の文芸4（佐々木均太郎）
	No.45	55.1	芸術教育	大分県の芸術教育（首藤萬寿生）、学校教育と芸術教育（猪俣士郎）、文芸（米 育（山本峯生）、芸術教育を望む（狭間久）、15回県芸術祭新人賞（中村勝利）、豊
	No.46	55.4	80年代を迎えて	80年代の県民文化育成に望む（帆足敏郎）、先取りした地方の時代（宮崎寛一 材ショック（花田衛）、別府文学学校（志村泰治）、三重町芸術文化発表会（伏野宗
昭和55年度	No.47	55.7		大分県の芸術文化活動に望む（友田享史）、中国旅行（尾登一信）、上田保氏を 展を考える、日出文化活動の現況（佐藤暁）、55年度募金計画（徳丸欽也）、芸振
	No.48	55.10		シルクロードの旅（河野彰）、16回県芸術祭開幕行事（樋口愁枯）、「おおいたの て（狭間久）、梅園と長寿論（白井淳三郎）、玖珠町文化活動（豊国文隆）、広瀬晴四
	No.49	56.2		県民文化育成に望む（糸永正武）、科学者三浦梅園（高浦照明）、加来飛霞（辻 芸術祭賞、新人賞（工藤玲子）、（佐藤寿子）、功労賞（戸田彰一）、10冊になった
	No.50	56.3	50号記念	「芸振」創刊号より～50号までの索引、「芸振」50号を記念して（米田貞一）

活動、(昭49・50年) あの頃・あの時 <戦後20年から県芸振会議が発足した39年頃までのこと>、	発行人(会長)	編集人(事務局長)	編集実務者
術祭(大賀基宏)、芸術祭の後始末(平瀬克美)、若い照明家(柏木淳一)、豊かな心(仲町謙吉)、芸館のへの道(加藤公康)、オペラ「カルメン」(小長久子)、生きる喜び(木村成敏)	辻 英武	浅田弘明	藤原嘉久
象の頂点(湯原恭子)、地元ですばらしい舞台(後藤智江)、私の歩む道(安東光子)、伝統を守り(藤間茂の手に(園田喜平)、県民皆踊(江藤豊南)、地方における舞台活動(菅淳一)、育てよう(谷本一夫)			
藤邦明)、郷土の人の心(菅沢活水)、演劇活動に青春(平岡敏彦)、演劇教室(中沢とおる)、自立劇団に(野呂祐吉)、児童文化会館(二宮敬介)、子供劇場(三河尻修二)			
玲子)、自然と彫刻(合田習一)、臨書に燃え(荒金幽岳)、クリエティブな生(芦刈博美)、感動の頂点(森秀心にひびく書(松岡小寿)、強烈な個性(古川栄)、先輩作家展とその保存(伊福啓男)			
芸振会議役員、事務局名簿、初の県芸術祭賞(市町村)を受けた頃(渡辺泰三)、大分県芸術祭運営協議	挾間正年	浅田弘明	藤原嘉久・辛島光義
美術館名品展によせて(芦刈政治)、県芸術祭開幕公演と取り組んで(花柳有句秀)、閉幕行事を引き受一)、(十時良)、(正田青峰)、(岡野博文)、ひろがりと連帯(田中美光)			
回県芸術祭賞、大分県芸術文化基金への提言(安部遊雲)、大分県芸術文化活動にかつを(矢野正一)、年をふりかえって(加藤公康)、豊後水道の文芸1(佐々木均太郎)			
童年によせて(帆足清一)(浜小路悦生)、故藤沼恵先生の10周忌によせて、短歌と私(長門はる子)、九(佐々木均太郎)			
信)、文化基金についての私見(菅淳一)(後藤隆霊)(脇正人)、高校総合文化祭(五島辰夫)、バトント津留鉄男)、豊後水道の文芸3(佐々木均太郎)	挾間正年	尾登一信	藤原嘉久・辛島光義
とが燃えるに出演して(向畠秀隆)、県児童文化祭ふるさと大分(三河尻修二)、影絵大分県の昔ばなし長久子)、耶馬渓文化フェスティバル(野村貞澄)、県芸術祭の裏方さん(森山稜子)、(安部康英)、(渡辺			
田貞一)、美術(仲町謙吉)、音楽(辛島武雄)、舞踊(樋口愁枯)、演劇(高橋寿満)、芸術会館と芸術教後水道の文芸5(佐々木均太郎)			
郎)、80年代を迎えて(歌田雅哉)、(桐明桂一郎)、(井口恒勇)、歴史民俗資料館建設(後藤昭六)、人孝)、県芸術文化基金1年次目標達成、豊後水道の文芸6(佐々木均太郎)			
偲んで(宮瀬香多士)、県短文学界へ提言(倉田紘文)、宮崎豊寿喜展(進来哲)、県美協15周年記念特別会議役員、事務局職員名簿、豊後水道の文芸7(佐々木均太郎)	挾間正年	尾登一信	藤原嘉久・辛島光義
祭り」ご苦労でした(平瀬克美)、筝と尺八ジョイントリサイタル(板井南桜山)、中国の仏教遺跡を訪ね郎氏急逝(藤原嘉久)、弔辞(菅久)、豊後水道の文芸8(佐々木均太郎)			
英武)、前野良沢(中沢とおる)、16回県芸術祭閉幕行事を終えて(山本恭正)、(久保不二郎)、16回県県文化年鑑(菅久)、豊後水道の文芸9(佐々木均太郎)			
(尾登一信)、「芸振」50号をふりかえって(藤原嘉久)、豊後水道の文芸10(佐々木均太郎)			

＜れんさい＞

豊後水道の文芸 その10

大分大学教授　佐々木　均太郎

木下利玄「紅玉」と豊後水道

木下利玄は、明治一九年岡山県に生まれ、一三歳ですでに佐々木信綱門下。「白樺派」創立のひとり。歌人として独自な境地を開拓し、作品は中・高校教科書にも多数採択されている。大正一四年二月死去。

この利玄も大分県とは関係深い。特に大正五年（三一歳）の一二月に夫人同伴で別府に来て、翌六年一二月一七日まで約一年間滞在。この間佐賀関、臼杵、佐伯、道後などを訪れ、豊後水道を舞台にした短歌や日記を残している。歌集「紅玉」（大正八年）は利玄の第二歌集であるが、その中の「磯潮」の歌は、豊後水道の波をスローモーション・カメラで撮影したような、自然と人間の穏和な調和の世界を歌いあげたすぐれた作品である。

・朝の潮ゆたかにみてり築岸に上揺れ波の上り下りすも

・はがね色の湾一面のとがり波西日きらきらに風すさぶかも

・たふれんたふれんとする波の丈をひた押しにおして来る力はも

・大き波うねりのびあがり高みより磯もと揺すりたふれ落ちたり

・うねり波たかまりあがり水底めがけ重みまかせに倒れたるかも

・くだけたる波の白泡いっさんにひろがりつめんときほひ寄せ来も

豊後水道の波を利玄は顔をちかづけるかのごとく見つめている。利玄より以前に、波浪をここまで分解して写した歌人はいなかった。

三月三日の日記には次のような描写がある。

「四時半にめざむれば沖べに人声がどよんでゐる。もし夜漁かと起きて見ると磯近き沖合を今夜はくもりたる事とて暗い沖のただ中に漁火が四〇点程煌々とてり、声はそこからくる。磯にはひそかに波がよってゐる。」

当時の豊後水道の闇夜は、夜漁の火でにぎわい不夜城をなしていた様子がよくわかる。

大正六年一二月、長女夏子を亡くした利玄は傷心の身やるかたなく別府を引き払った。（終）

「芸振」50号をふりかえって

事務局次長　藤　原　嘉　久

ささやかなパンフレットの機関紙「芸振」が50号になった。或る年の芸振会議の総会で一会員が「毎回『芸振』を送ってもらっているがあまり読んだことはない、経費を他のことにまわしたらどうか」と発言したのにはいささかゲンナリし、かと思えば「県下の文化活動の現況がある程度よくわかる」「芸振会議の広瀬事務局次長の姿が見えなかったが急逝されたのを『芸振』で知った」「県芸術祭を初め、いろいろな文化行事や事業についての記録は『芸振』と『文化年鑑』が大きな役割をはたしている」……等々会員や一般の方々の声を聞くにつけ、少し落胆したり、意欲を燃やしたりのくり返しであった。

菅　久氏（現理事）から編集実務を引き継いでここ数年県下の芸術文化人との人間関係、仕事の内容など、学ぶことは多大であった。つたない企画・編集をここまで援助して下さった事務局各位、諸団体や会員・一般の執筆者の方に厚く御礼を申し上げたい。

今後の問題として、文化基金が活用の段階に入れば、原稿料の問題や広告の編集実務者分担など、早急に財政的なものの解決が望ましい。

さらに、現在の事務局の体制を考える時、どうしても専任の事務・企画・編集担当者が必要であり、これが一番の問題であろう。

この50号は、創刊号より49号までの総索引を内容として「芸振」10年をふりかえった。資料・原稿は菅　久理事が執筆されたものである。編集者として深く感謝する次第です。

ピアノ保存友の会会員募集

会員特典

- 調律・修理等特別料金
- 防虫・錆止加工サービス
- ピアノ他当店取扱品の特別料金

大分文化会館・芸術会館・別府観光会館　専属調律師

ヤマハ
デアパソン
シュバイツァ
大分県特約店　白沢ピアノ店

TEL　0975—32—3930